

2023年5月28日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

タイトル：ペンテコステ「聖霊が降る」

聖書箇所：使徒の働き 2章1～13節

ペンテコステ、おめでとうございます。イエス様は、甦ってから40日間、弟子達の前に現れ、弟子達に教え、そして天に昇って行かれました。そしてイエス様の昇天から10日後、イエスが約束しておられた聖霊が天から降って来られたのです。その聖霊降臨を記念する日を「ペンテコステ」と言います。それがこの聖日です。ペンテコステはキリスト教の三大祭りの1つです。教会の誕生日でもあります。改めておめでとうございます。

聖霊について「イザヤ書」にこんな記事があります。「…彼らを海から上らせた方は、どこにおられるのか。その輝かしい御腕をモーセの右に進ませ、彼らの前で水を分け…荒野の中に行く馬のように、つまづくことなく彼らに深みの底を歩ませた方はどこにおられるのか。家畜が谷を下るように、主の御霊が彼らをいこわせた」（イザヤ63:11～14）。「出エジプト」の時、「神が御業をもって民を導き出されたこと」が回想されている言葉ですが、ポイントは、奴隷の苦しみの中にいた民が救い出されたり、紅海が2つに分けられたり、草木一本も生えないような荒野で食べ物を食べ、水を与えられて彼らが生きて来ることが出来たのは、「それは彼らの中に『神の御霊』がおいでになったからだ」とイザヤが言っていることです。神様は聖霊を通して、様々な御業をなさるのです。聖霊が、私達の魂の中で、私達の状況の中で、働いて下さるのです。「聖霊」は「見えないイエス様、見えない父なる神様」と考えても良いと思いますが、今朝は「ペンテコステ」の出来事を伝える箇所から学びます。

## 1：「ペンテコステ」に何が起こったのか

イエスが十字架に架かれたのは、「過ぎ越しの祭」というユダヤの祭の時でした。2章1節の「五旬節」と訳されている言葉は、言語では「ペンテコステ」ですが、『過ぎ越しの祭』から数えて50日目の祭を指す言葉です。それはユダヤ教の大切な祭でした。それでローマ帝国中から大勢のユダヤ人がエルサレムにやって来ていました。しかし外の賑わいをよそに、イエスの弟子達、母マリヤと兄弟達は一つ所に集まって、イエスが約束された「聖霊」が来られるのを祈りながら待っていました。イエス様は、天に上られる前、「エルサレムを離れないで…待ちなさい…もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです」（1:4～5）と約束して下さっていました。そこに聖霊が降られました。その時、どんなことが起こったのか、詳しいことは分かりませんが、聖書から3つのことは知ることが出来ます。1つは、2節「激しい風が吹いてくるような響きが起こり、家全体に響き渡った」（2）のです。「風」と訳されている言葉は「息」とも訳される言葉で、「風や息」は「神の霊、聖霊」を表す言葉として使われました。ですからそれは、聖霊が臨んだことを示すしるしでした。2つ目は3節「炎のような分かれた舌が現れて一人ひとりの上にとどまった」（3）。「炎」や「火」も聖霊を表す比喩として用いられた言葉です。3つ目は、彼らが「他国のことばで話した」（4）ことです。彼らはほとんどがガリラヤ人でした。普段は「アラム語」を話しました。その彼らが9～11節にあるような広範な地域からやって来ている人々の国語を話し出したのです。

いずれにしても、聖霊を受け、聖霊に満たされた彼らは、隠れ家から外に出て、神殿まで行き、「9～11節」にある広範囲な地域から来ている人々の国語で語り出しました。そこで—（14節から後になります）—弟子のペテロが世界で初めてのキリスト教のメッセージを語るのです。

## 2：「聖霊降臨」が弟子達に意味したこと

この出来事は何を意味するのか。それは「イエスを信じる全ての人に聖霊が注がれる『聖霊の時代』が始まった」ということです。それは弟子達にどういう意味があったのでしょうか。十字架で死んだイエス様が甦って弟子達の前に現れた時、弟子達は興奮したでしょう。彼らは生前のイエス様と共に過ごしてその働きを見て、その教えを聞いていました。十字架の時は躓いたけど、復活のイエス様に

会いました。40日の集中講義も聞きました。「イエス様が甦った。出て行ってこのことを人々に語りたい」、そういう気持ちだったと思います。(私達も凄い話、興味深い話を知っていたら誰かに話したいでしょう)。でも「1章4節」でイエスが命じられたことは、「父の約束を待ちなさい…もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです…聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます」(使徒1:4,8)、つまり「聖霊を待ちなさい」ということでした。かつてイエスは、聖霊について「わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします」(ヨハネ16:7)とされました。「その『助け主/聖霊』を待て」と言われたのです。なぜなら聖霊を受けずに動く人間の力は当てにならないし、長続きしないからです。

ペテロは、「最後の晩餐」の時、「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません」(マルコ14:31)と言いました。しかし、その舌の根も乾かないうちにイエス様を裏切ったのです。ペテロはその経験を通して、人間的な勢いや元気がいかに頼りないものかを知ったのです。他の弟子達も同じでした。人間は弱い。いざとなったら私達は、色々な意味で弱いのではないのでしょうか。だからイエスは「聖霊を受けるのを待ちなさい」と言われたのです。そして聖霊を受けた時、彼らは自分の力ではない、聖霊に支えられて、イエスを十字架につけた権力者の牙城である神殿に出て行くのです。そして権力者を見据えて—(それまでは、その人々を恐れて逃げて隠れていたのです)—イエスの甦りを語り、「イエスを信じなさい」と語ったのです。ここにキリスト教会が誕生するのです。

### 3:「聖霊降臨」が私達に意味すること

「聖霊降臨」は、2000年後を生きる私達に、何を語るのでしょうか。それは私達にも助け主が必要だし、そして私達にも、イエスを信じる時、聖霊が与えられるということです。

私達にとって一番切実なのは、聖霊は、私達の信仰を守って下さっているということです。CSルイスというイギリスのクリスチャンの文学者、作家がいます。彼は60歳を過ぎてから初めて結婚をしますが、その時には既に妻となる女性はガンに冒されていました。一時的に奇跡的な回復を見せますが、3年後に妻は亡くなってしまいます。その悲しみの中で「悲しみをみつめて」という本を書きます。この本には、やり場のない悲しみ、悲しみの故の神に対する怒りや非難が書いてあります。信仰は危機に瀕しています。それこそ「神が何だ、信仰が何だ」という感じです。しかし、そのことを通して彼は、「自分が『信仰だ』と思っていたものが、いかにもろいものであったのか」、その真の姿がさらけ出されるのを感じるのです。しかし同時に、自分の信仰の状態がどうであるかを越えて、それもこれも包み込んで、彼を導いて行かれる神様に気付くのです。言葉を換えれば、彼の神との関係は、彼の信仰にかかっていたのではないのです。神の方が彼を導いておられたのです。それこそ聖霊の働きです。私達の信仰も、実は、私達が必死に信じて、信仰を守っているのではない、聖霊によって守られているのではないのでしょうか。

それだけではありません。イエス様は、私達が祝福の人生を生きるための秘訣を沢山教えて下さいましたが、聖霊の助け無しには、聖書の教え、イエス様の教えを生きることは出来ないのです。イエス様は「あなたの敵を愛しなさい」(ルカ6:27)、「赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます」(ルカ37)と言われました。(皆さんには敵がいますか。自分を、自分の人生を、傷つけた人、自分に害を及ぼした人、自分に辛い仕打ちをした人、そういう人を簡単に赦し、愛せるでしょうか)。「第二次大戦中、ユダヤ人を匿ったということで強制収容所に入れられたオランダ人のコーリー・テン・ブームという女性がいます。家族は収容所で殺され、彼女も辛い思いをしました。しかし戦後、彼女はヨーロッパの人々にキリストの和解を説いて回りました。ドイツにも行きました。ある教会で和解のメッセージを語り終わった時、1人の男が前に出て来ました。それは、かつて彼女が入れられていた収容所の看守をしていたナチスの将校でした。彼は言いました。「私は収容所の看守をしていました。でも、その後、クリスチャンになったのです。でも、あなたの口から『赦す』と言って欲しいのです。赦し

てくれますか」。一般論を語ることに、自分に直接関わることに相対することでは、違うのです。彼女はどうしても手を差し出すことが出来ませんでした。しかし祈るのです。「主よ。助けて下さい。私の手を差し出すことは出来るはずです。必要な感情は、あなたが備えて下さい」。彼女は、固まった手を差し出した、その時です。肩から始まって彼と握手をしている手に向かって暖かいもの、彼女の全ての傷、痛みを癒すような暖かな何か流れた。そして彼女は言うのです。「赦します。心からあなたを赦します」。聖霊の働きです。聖霊は、イエス様が教えて下さった祝福の道を歩むことをも助けて下さるのです。

いずれにしても、私達にも、信仰生活において、聖霊の助けを必要とする色々な場面があるのではないのでしょうか。しかし問題は、どうすれば聖霊が私達のところに来られるかということです。私達は、信仰を告白して洗礼を受ける時に聖霊のバプテスマを受ける、と信じていますが…。聖霊に与っているような気がしないとおっしゃる方がおられましたら、次の点を確認して下さいと良いと思います。

聖書には、2つのことが聖書に教えられています。1つは、この後の方ですが、2章38節でペテロは人々に説教して言いました。「…このイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」(38)。そして最後に言いました。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう」(38)。「あなた方は自分がイエスを十字架につけたことを自覚して、悔い改めなさい」と呼びかけました。その目的を「罪を赦していただき…聖霊を受ける(ために)」と言いました。ペテロの説教を聞いた人達の中には、50日前に「(イエスを)十字架につけろ」と叫んだ人もいたのです。しかしそれは、2000年後の私達には関係のない話でしょうか。しかし水野源三さん—(子供の頃の脳性麻痺で体の自由を失い、生涯、瞬きしか出来ず、しかし瞬きだけで沢山の信仰の詩を書いた詩人)—は、こんな詩を作っています。「ナザレのイエスを、十字架にかけよと、要求した人、許可した人、執行した人、それらの人の中に私がいる」。何を言っているかということ、「私の罪が赦されて、私が聖霊に与ることが出来るように、イエスが十字架に架かって下さった」と言っているのです。私達も、聖霊に与る、そのポイントは「罪の自覚と悔い改め」です。

自分の話をして申し訳ないのですが、参考までに…。私は、学生の時に、ある問題の中で、教会学校で聞いた神様を思い出して、「助けて下さい」と神様に願って教会に飛び込みました。そして神様に助けて頂き、7年ぶりに教会に繋がるようになりました。そして勧められて洗礼を受けたのですが、洗礼に与った時、心からの罪の自覚と悔い改め、それがなかったように思います。だから教会で話されていることが良く分からないのです。「神の恵みが…」と言われても、「恵み」が分からない。礼拝も、出席しないと何となく不安で義務的に参加していました。ところが就職して、職場での失敗を通して、「自分も罪人だった」ということが身に染みて分かる機会がありました。その時、神様に赦しと助けを求めて、すがるようにして祈りました。そして教会を通して、神様から「赦し」の宣言を頂きました。それから十字架が輝き出すようになりました。「恵み」が分かるようになったのです。神様を求める気持ち、神様への感謝の思い、そういったものが静かに湧き上がるようになりました。私は、それが自分にとっての聖霊のバプテスマ(洗礼)だったのではないかと考えています。

個人的な話をして申し訳ありませんでしたが…。だから聖書が語るように、「聖霊に与るための罪の自覚と悔い改め」ということが重要なポイントではないかと、自分の体験からも思うのです。

「罪」とは何でしょうか。私達の回りにいる方々は、多くの方々が善人に見えます。しかし「人間は皆、生まれながら罪を抱えている」、それが聖書の教えるところです。「原罪」と言います。これは人間がどうしてもなく持っているものなのです。それを理解することは大事なことなのです。カナダにいる時、ある方と聖書の勉強をしているのですが、その方が「私は自分が罪人だとはなかなか思わない」というようなことを言われました。私は「妬み」の話をしました。「妬み」は、頑張っても妬もうと思わなくても自然に湧き上がって来るものではないのでしょうか。私達は、「醜い感情だ」と知っています。しかし、どうしてもなく湧き上がって来るのです。なぜでしょうか。「人の罪は妬みに現

れる」と言った人がいますが、それは私達に罪があるからです。妬むから罪があるのではない、罪があるから妬むのです。恨み、憎しみ等も同じです。つまり私達は、罪を持っているのです。そういう話をさせて頂いたら、その方も「私も罪だらけです」と納得して下さいました。

作家の三浦綾子さんは、「罪」を「自己中心」と表現しました。私達は何でも自分を中心に考える、イザとなれば「自分さえ良ければ良い」という自己中心を持っているのではないのでしょうか。(しばらく前、マスクを買うためにドラッグストアの前に並んでいる時に、他人の中にも、自分の中にも、それを感じました)。あるいは三浦さんは、こうも言っています。「何気なく言う悪口、陰口…その心の中にとぐろを巻いているのは、敵意、ねたみ、憎しみ、優越感…ではないか…だが人の悪口を言ったことのない者はいないだろう。私達は1人残らず罪深いのだ」(三浦綾子)。三浦綾子文学の研究者・森下辰衛という先生は「人間の罪は『もう愛せない、もう愛さない』、そこに現れる」と言いました。私は、14年間、教師をしましたが、子供達への愛がないために、子供達を傷つけてしまった、そんなことが思い出されます。自分の力では愛に生きることも難しい。

申し上げたいことは、私達には罪があるということです。でも自分では、その罪をどうしようもないのです。何より罪があると神に受け入れられない。だからそのために、イエス様が私達の罪を背負って身代わりに十字架に架かって下さった、そして神と私達の間を橋を架けて下さった、それが十字架の意味です。だから自分の弱さ、罪、自己中心、妬みや裁き、そういうものを認め、「神様、裸の私はこんな者です。赦して下さい。私の罪のためにイエス様が十字架に架かって下さったことを信じます。感謝します。助けて下さい。神様の力を下さい」、そう祈る時、神は私達を受け入れて下さり、そしてその時、喜んで聖霊を注いで下さるのです。

そしてもう1つ、大事なことは、聖霊を求めて祈ることです。イエスは言われました。「天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますか」(ルカ 11:13)。悔い改め、赦しを求め、そして聖霊の助けを求めるその人に、聖霊が働くようになるのです。それが「聖書」の約束です。初代教会の人達は、教会に集まって何をしていたのか。彼らは祈っていたのです。祈りに打ち込んでいたのです。その中で、聖霊の働きに与って行くのです。

まとめます。2000年前の「ペンテコステ」、罪を悔い改め、イエス様の十字架を感謝して見上げる全ての人に、そして聖霊を祈り求める人に、聖霊がやって来られる時代が始まったのです。そして、今もそうです。聖霊が私達の傍らにやって来られ、助けて下さいます。神の力を注いで下さいます。やがては、誰も死を迎えます。でも聖霊は死にも打ち勝たせて下さいます。生きるにも、死ぬにも、聖霊が助けて下さる。それがキリスト教信仰の祝福です。私達も、聖霊の助け、力に与って、聖霊のお働きによって力強い信仰生活をさせて頂きたいと願います。